

日本英文学会関東支部
第10回（2014年度秋季大会）
プログラム

日時：2014年10月26日（日）

会場：上智大学 四谷キャンパス（11号館）

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

アクセス

JR 中央線、東京メトロ丸ノ内線・南北線
四ツ谷駅 麴町口・赤坂口から徒歩5分

日本英文学会関東支部事務局

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2

研究社英語センタービル

Tel/Fax 03-03-5261-1922

E-mail:kanto@elsj.org

11:20 会場・受付開始 (11号館3階)			
11:40 12:40	研究発表	第一会場 11号館320教室	第二会場 11号館326教室
		解放されない Jurgis : 他者性を再生産する <i>The Jungle</i> の語り (発表者) 一橋大学大学院 山崎 亮介 (司会) 東京工業大学教授 上西 哲雄	Saki の “The Peace of Mowsle Barton” における「安らぎ」と「静けさ」の表象 (発表者) 立教大学大学院 熊谷 めぐみ (司会) 一橋大学准教授 河野 真太郎
12:50 13:20	総会 (11号館704教室)		
13:30 14:30	特別講演 (11号館704教室)	From public to private epiphanies: Jane Austen, Mary Wollstonecraft, Edmund Burke and the spots of time Professor Janet Todd (University of Cambridge)	
14:45 16:45	シンポジウム (11号館704教室)	モダニズム文学と知識人サークル (司会) 首都大学東京准教授 辻 秀雄 (講師) 首都大学東京准教授 吉田朋正 (講師) 一橋大学教授 越智博美 (講師) 東京学芸大学教授 大田信良	
17:30 19:30	懇親会 (上智紀尾井坂ビル5階第2会議室 四谷キャンパス内)		

開場・受付開始（11:20 より 11 号館 3 階にて）

11:40-12:40

【研究発表】

第一会場（320 教室）

（発表者）一橋大学大学院 山崎 亮介
（司会）東京工業大学教授 上西 哲雄

解放されない Jurgis :
他者性を再生産する *The Jungle* の語り

Upton Sinclair (1878-1968) が作品にこめた政治的企図は、*The Jungle* (1906) の終幕で主人公 Jurgis Rudkos が社会主義思想に啓発されることにより果たされている。本発表は、本作を作者のプロパガンダと認識してきた批評史の政治的読解を踏まえつつ、テキスト内部における Jurgis の文化的位置を再確認し、他者性の生産を階級イデオロギーの問題と結びつけることで、階級カテゴリーを指定した本作の読みとテキスト内部における文化的差異の表象を再検討するものである。

特に本発表においては、本作におけるリトアニア文化の従属性の考察が Jurgis の社会的地位と他者性の性質を明らかにする土台となる。さらに従属文化と階級の関係性をより密接な表象するものとして Jurgis の肉体を提示し、生産能力の有無に付随する階級内部のヒエラルキーの存在を確認することを通して、階級に付随するその一枚岩的なステレオタイプな表象を問題化する。

第二会場（326 教室）

（発表者）立教大学大学院 熊谷 めぐみ
（司会）一橋大学准教授 河野 真太郎

Saki の “The Peace of Mowsle Barton” における「安らぎ」と「静けさ」の表象

本発表の主題は、Saki の短編小説“The Peace of Mowsle Barton”(1911)における、都市と田舎を表象する「安らぎ」と「静けさ」という概念の独自性に着目することで、本作品に単なる都市と田舎の価値を転倒させた風刺物語以上の意義を見出すことにある。田舎の「静けさ」の中に「安らぎ」ではなく恐れを見出し、都会の「騒音」の中に「安らぎ」を見出すこの作品の中に、イギリス文学における都市と田舎の表象の重要な変化を内包する物語としての可能性を考察していく。

13:30-14:30 704 教室

【特別講演】

From public to private epiphanies:

Jane Austen, Mary Wollstonecraft, Edmund Burke and the spots of time

Professor Janet Todd (University of Cambridge)

The political writers of the 1790s, radical and conservative, describe moments close to Wordsworth's psychological 'spots of time', climactic instances that take a person beyond ordinary quotidian life, whether in a crowd or in isolation, and produce or strengthen intuitive understanding. The politically radical writers, Mary Wollstonecraft, Richard Price, and Helen Maria Williams, all portray such moments, as does their conservative opponent Edmund Burke. Interestingly, Wollstonecraft in her last years seems to move to the more Romantic inward use of the visionary or still 'spot of time'. Jane Austen, a writer from a couple of decades later and often seen in opposition to these earlier overtly political authors, in the novels begun in Chawton (*Persuasion* and *Mansfield Park*) uses such moments in the way one would expect: to reveal the depths of an inner life. This is not my subject here but the more surprising fact that in *Emma* she gives such moments some political resonance.

14:45-16:45 704 教室

【シンポジウム】

モダニズム文学と知識人サークル

(司会)	首都大学東京准教授	辻	秀雄
(講師)	首都大学東京准教授	吉田	朋正
(講師)	一橋大学教授	越智	博美
(講師)	東京学芸大学教授	大田	信良

本シンポジウムは、作家・文壇人・大学人・編集者といった人々の間にある関係性そのものに焦点をあて、モダニズム文学の思潮動向をたどることを目的とする。1920年代から第二次世界大戦後までの長めの期間を設定し、その間のアメリカ国内におけるイデオロギーの変遷——文壇・思想界での左翼的傾向から独ソ不可侵条約をきっかけとした共産党離れ、そして冷戦下のニューリベラリズムの勃興——をふまえながら、トランスナショナルな知識人サークルの栄枯盛衰の現場・瞬間を再訪し、モダニズム文学の土壌、あるいは磁場を再確認していきたい。

知識人サークルの蜘蛛の巣的な広がりをとらえるためにも、それぞれが一旦発表を行った後に登壇者間で互いの発表の接点を確認する時間を重視したい。

■ モダンの縊り糸——Malcolm Cowley、Edmund Wilson、Kenneth Burkeの「危機の20年」

吉田 朋正

ロスト・ジェネレーションを代表する三人の批評家、Edmund Wilson、Kenneth Burke、Malcolm Cowleyを取り上げ、彼らが共に生きた「危機の20年」を探る。後年、それぞれ〈歴史〉〈理論〉〈編集〉の分野で異なる才能を発揮することになる彼らは、30年代半ばまでは、しばしば活躍の場を同じくしたジャーナリスト仲間であった。本発表では特に〈編集〉者カウリーに光を当て、*Exile's Return*に描かれた喚起力に富む史的モザイクの数々——ミュルジュールたちの「ボエーム」や、ドレスデンにツルゲーネフを訪ねる国外逃亡中のドストエフスキー、感嘆と共にパリ・コミューンを眺めるカール・マルクス等々——を読み解くことから始めたい。同書で常に喚起されるこうした過去の事象は、なぜ、いかにして当時のアメリカの知的若者たちのアクチュアルな問題であり得たのか？ 大恐慌以降に関しては、*Exile*の続編として当初企てられ、1980年によりやく上梓された30年代録、*The Dream of the Golden Mountains* 等をひもときながら、三人が共に活躍した*The New Republic*誌周辺の知的状況を可能な範囲で明らかにして行く。

■ フェージティヴ詩人、南部を出る——「モダニズム」の承認に向けて

越智 博美

テネシー州のナッシュヴィルの同人誌*The Fugitive* (1922-1925)は、実に短命だったが、逆にそのことが、Allen TateがT. S. Eliotとともに導入した「モダニズム」を、その後新批評とともに制度化する端緒となった。当時アメリカ文学研究を制度化しようとしていたMLAのアメリカ文学グループとは繋がりのない彼らがいかにして周縁的な存在を脱したのか。

Robert Gravesの*A Survey of Modernist Poetry* (1927)は、テイト流の「モダニズム」を大西洋の向こうに運んだが、それとともにナッシュヴィルを離れたRobert Penn Warrenやテイトはそれぞれ渡欧し、またニューヨークに居を構えて人脈と発表メディアとの繋がりを構築し(*New Republic*、*Partisan Review*)、またみずからその場を作り出して(*Kenyon Review*、*Southern Review*) 発信と流通の足場を構築してもいく。最終的に非政治的なものとしてのモダニズム詩と新批評が冷戦期のひとつのスタンダードとなるその過程は、実はフェージティヴ詩人たちが雑誌の打ち切りとともにナッシュヴィルを去るところから始まることを、アンソロジーに収められる詩も眺めやりつつ、彼らの地理的移動と人的・制度的ネットワークの構築から再考したい。

■ モダニズム文学とオクスフォード大の諸知識人グループ——「モダニズム」と「モダン」はどのように差異化・差別化されたのか？

大田 信良

「モダニズム」と「モダン」は、歴史的に、どのように差異化・差別化されて、21世紀の現在に至っているのか。この問いに答えるために、冷戦期のリベラリズムと文学研究・教育制度から遡行して、1920年代以降の米国東部の文学者たちと南部知識人たちとの関係性の結節点たる英国オ

クスフォード大の空間を取り上げる。

まず、ボストンのハーバード大から様々な移動をして 1922 年ロンドンでの T. S. Eliot の *The Waste Land* 発表を契機に、ヴァンダービルト大のフュージティヴ・グループに加わった Allen Tate がアメリカ詩をモダニズムという用語によって発展させプログラム化する批評作業を開始し、さらに、この用語が、その弟子の Laura Riding と英国詩人 Robert Graves, *A Survey of Modernist Poetry* (1927) を通じてトランスアトランティックに伝播されて、オーデン・グループに取り込まれ占有される過程を、確認する。その上で、モダニズムの用語の価値や意味がその後歴史的に隠蔽され書き換えられる様々な始まりのひとつの瞬間として、Evelyn Waugh, *Brideshead Revisited* (1945) におけるメディア文化空間としてのオクスフォード大の屈折した表象とその“popular conservatism”を検討する。

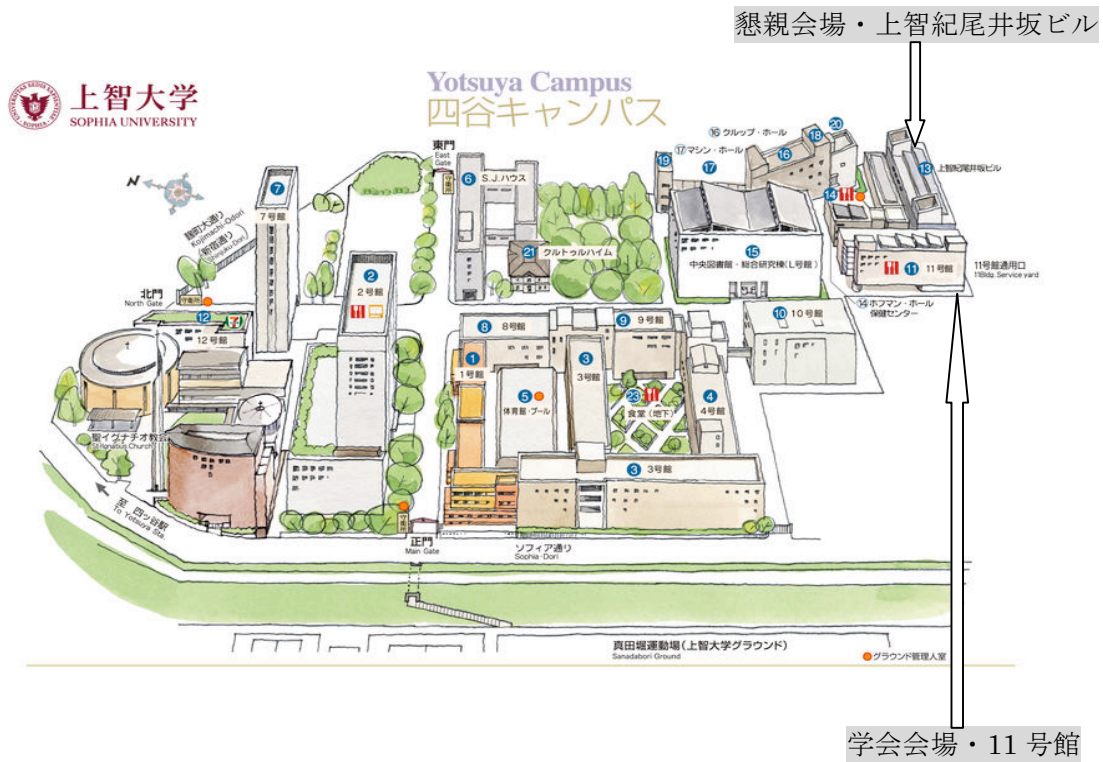
懇親会 (17:30-19:30)

会場 上智紀尾井坂ビル 5 階第 2 会議室
(四谷キャンパス内)

会費：4,000 円 (学生 2,000 円)

事前申込は不要です。奮ってご参加ください。

キャンパス・マップ



アクセス・マップ

最寄り駅から

- JR 中央線、東京メトロ丸ノ内線・南北線 四ッ谷駅 麴町口・赤坂口から徒歩 5 分

